

ほめはどのようなコンテキストで現れているか

一日中の初対面会話におけるほめの出現パターン

昂燕妮(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

日常の会話において、ほめは様々な場面で行われている。ほめがいつ行われるかは、その背景となる社会文化の影響を受け、話者の有する一般常識や社会通念が参照される(筒井, 2012)。異文化間コミュニケーションにおいては、社会文化の相違が原因で、ほめを行うタイミングを間違ったり、ほめが期待される場面で適切にほめることができなかつたりするようなケースが起きやすいと思われる。こうしたコミュニケーション上の問題を解決するには、ほめがどのようなコンテキストで行われ、言語文化によってどのような相違があるかを明らかにする必要がある。

2. 先行研究と本研究の課題

ほめは、前の文脈や発話の状況を受けて現れる場合が多いと思われる。しかし、ほめに関するほとんどの研究はほめ行動自体のみに着目しており、ほめが行われる前のやりとりに関する分析はまだ少ない。

熊取谷(1989)は、談話における「ほめ-応答」の発話連鎖を「本連鎖」とし、その前後のやりとりをそれぞれ「先行連鎖」「後続連鎖」と呼び、「先行連鎖」に関してはほめの対象を談話に導入する機能を持っているとしている。この主張を踏まえ、金(2012)はほめの談話の流れを「先行連鎖-本連鎖-後続連鎖」とし、日韓の大学生友人同士のほめの談話構造を比較分析している。その後、王(2020)は、金(2012)の枠組みを援用して日中のほめの談話構造を対照分析している。その結果、「先行連鎖」については、日中ともに、ほめの対象に関連する話題を導入してからほめる傾向にあり、その際に「質問・確認」や「情報提供」などのストラテジーが多用されているとしている。

しかし、先行研究が注目しているのはほめの談話構造であり、なぜ今ここでほめがなされたかという、会話におけるほめが行われるコンテキストの分析にまでは踏み込んでいない。本研究では、異文化理解に資する知見を得るために、日本語と中国語の会話におけるほめが出現するまでのプロセスに注目して分析を行い、ほめはどのようなコンテキストで行われているか、言語文化による相違があるかを明らかにする。

3. 分析データ

分析のデータは、筆者が収録した、20代の日中母語話者の初対面同士の会話(各12組)の録音・録画である。調査時には、協力者に「簡単な自己紹介」「趣味・好きなこと」「頑張っていたこと」「最近あった良いこと・面白いこと」の4つのトピックを提示し、そこから話したいものについて自由に話してもらった。会話収録後は、フォローアップインタビュー(FUI)を実施し、会話当事者がお互いの言語行動をどのように認識しているかを調査した。さらに、FUIに基づき、会話参加者双方ともに「ほめである」と認識している言語行動をほめとして認定する。会話データから認定したほめの数は、日本語46例と中国語48例であった。

4. 分析結果

ほめの出現パターンについて分析を行った結果、「同調型」「回復型」「価値見出し型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」の6つが観察された。まず、「同調型」のほめは、ほめが行われる前のやりとりに、受け手の肯定的な自己評価が含まれており、ほめ手がそれに同調してほめる場合である。

例1 「同調型」のほめ

67 J12 えっ、マラソンしました？。

68 J10 マラソンがずっと嫌いで<一緒に笑う>、運動音痴なんで、すごいずっと最下位走ってたんですけど、(うん)高校ぐらいの時、女の子はやっぱり、ちょっとさぼり気味っていうか、ちょっとマラソンしんどいよねってなるんじゃないですか？。

- 69 J12 うん、はい。
- 70 J10 そこで、それを利用して、なんかマラソンで一位を取ろうみたいな感じで毎日頑張っ、体力付けて一位を取って<笑い>。
- 71 J12 えーすごい<笑い>。
- 72 J10 <笑いながら>頑張ったなって。
- 73 J12 えらいな、えらいね、私も全然マラソン、結構そうら運動好きだけど(はい)、運動得意とらわけではないから<笑い>。

71 行目のほめに関して、会話を遡ってみると、それが行われたきっかけとなるのは70行目の発話であると思われる。つまり、70行目のJ10の「マラソンで一位を取ろうみたいな感じで毎日頑張っ、体力付けて一位を取って」という肯定的な情報開示に対して、J12は同調して「えーすごい」とほめている。続いて、72行目でJ10はまた「頑張ったなって」と肯定的な心情を開示しており、それを受けてJ12は再び同調して「えらいな、えらいね」とほめている。

伊藤(2012)によると、先行する発話に相手の肯定的な自己評価が述べられている場合、ほめを行うのはある程度当たり前であり、むしろほめないのは相手の肯定的な自己評価を認めないことになる可能性がある。このように、受け手が肯定的な自己評価を述べている場合、ほめ手には、それに同調してほめることがある程度期待されていると言えよう。

「同調型」のほめは相手の肯定的な自己評価に同調する行動であるのに対して、「回復型」はその反対側の、否定的な自己評価に対するほめであり、相手の気持ちを回復するために行う行動である。

例2「回復型」のほめ

- 23 J23 博士号まで取るというのがもう、すでに考えてらっしゃるんですか?。
- 24 J21 僕の中ではもう確定事項ですね。
(…中略…)
- 46 J21 こういと驚かれるかもしれないですけど、私、あの大学の内容というのを、実は自分のやりたいこととはかけ離れていて、さらに自分のやりたい内容を重視しすぎたが上に、大方留年するとこだったんですよ。
- 47 J23 <笑い>そうなんですか。
- 48 J21 はい、一年生の後期に、その後期に取ってた20何単位を丸々落としたくらいで。
(…中略…)
- 55 J23 その具体的に何をその当時打ち込んでらっしゃったんですか?。
- 56 J21 あのですね、当時というか、今もそうなんですけど、私はずっと生き物の研究がしたいんですよ、で昔ながらの図鑑とかに載ってるような、そのどこまで行ってもか、どうい食べ物食べていてとか、そういう生き物を純粋に研究したいんですけど、農学ってこういう生き物がいたら畑が良くなるよねとか、そういうことしかない、まあ、応用の方面の研究をやっても、僕はそうらとこがすごく嫌で、
- 57 J23 [頷きながら]うんー。
- 58 J21 で、自分の研究をやって、お金も引っ張ってきて、その民間の助成金とかを取って、自分でごちゃごちゃ研究してんですけど、研究研究研究ってなっていて、単位は取れないという状態になってしまった。
- 59 J23 なるほど、いや、でも、すごいですね、すごいと思いますよ、そこからね、あの、まあ、本当にその研究をしたい、それだけこく、まあ、専門的に勉強したいからこそやっぱ博士まで進まれるんですよね。
- 61 J21 はい、もちろん。
- 62 J23 博士に進むためにはもちろん大学を卒業しなくてははいけないから、ちょっとどうにか挽回しなければって。

例2でJ21は博士号を取る目標があるが、大学の専門にあまり興味がなく、自分の研究に集中しすぎて単位が取れなかったという、自分に関する否定的な情報を開示している。その情報を聞いたJ23は59行目で「いや、でも」と否定してから、「すごいですね、すごいと思いますよ」とほめることで、相手の気持ちを回復しようとし、さらに「本当にその研究をしたい」「専門的に勉強したいからこそやっぱ博士まで進まれるんですよ」とJ21の気持ちに理解を示している。

山路(2004)は、ほめは「マイナスを埋める」機能を持っており、相手の感情の中にあるマイナス要素を埋めるために行うことがあるとしている。このように、相手の否定的な自己評価の表明に対するほめは、相手の発話におけるマイナス要素を埋め、下げられたフェイスを高揚させ、気持ちを回復するために行われていると考えられる。

これまで分析してきた「同調型」と「回復型」は、相手の肯定的・否定的な情報開示に対するほめである。それに対し、「価値見出し型」のほめは、相手の中立的な自己評価の発話、または自己評価の含まれない発話から、ほめに値する事柄を見出してほめる場合である。

例3「価値見出し型」のほめ

- 39 J04 えー、どんな研究しているか聞いても大丈夫ですか?。
- 40 J02 あっ、全然大丈夫です、私はカンボジアのことやってるんですけど、教育専攻なので、えっと、カンボジアの小学生は留年制度あるんですよ、カンボジアって。
- 41 J04 すごいですね、厳しいー。

42 J02 <笑い>そうなんですよ、なんか、そういうふうな留年制度が、ヨーロッパのほうだと主流なんですけど、その植民地、ヨーロッパの植民地になつた国、東南アジアの国で結構そのまま留年制度とか、教育制度とかをそのまま持ってきてるので、留年とかめあって、留年しちゃう子たちがたくさんいるんですけど、その子たちが何で、何の要因で留年しちゃってるんだろうって研究しています。

→ 43 J04 へえー、面白い研究ですね、<一緒に笑い>、植民地だといふんですね。

44 J02 そうですそうです、っていうのをやってるんですけど、ちょっと今年コロナの影響でフィールドワーク行けなくなっちゃって。

例3の39行目で、J04はJ02の研究内容について質問をしており、J02から具体的な説明を聞いた後、43行目で「へえー、面白い研究ですね」とほめている。40行目と42行目のJ02の説明には自己評価が含まれていないが、J04は相手から得た情報が評価すべきものと判断して「面白い」とほめていると解釈できる。

本研究では、ほめ手はすでに相手をほめていたが、それが相手に受け入れられなかったため、相手がほめを受け入れてくれるように働きかけ、再度ほめる場合を「説得型」とする。

例4「説得型」のほめ

24 C07 [C07はあまり苦労せずに大学院に合格したことを語っている]每天都乐呵呵地跟大家一起(啊),就这样慢慢过来了,所以我觉得我也算努力吧,但没有像别人那样…。(毎日みんなと同じく勉強して(あ)、少しずつやってきたので、頑張ったと言ったら頑張ったんだけど、周りの人のように一生懸命やっているのとはちょっと違って…。)

25 C06 我觉得你很厉害啊,就很多人就是打着一定要考,一定要考上的心思去考([点头]),结果没考上,然后你就是这种,就是本来没想考,试一试就成功的这种,这就说明实力在那放着呢<笑>。(とてもすごいと思いますよ、合格しなきゃ、受からなければならぬと思っても落ちてしまう人が多いから[頷き]、逆にやってみただけで成功したのは、それはちゃんと実力があるからですよ<笑い>。)

26 C07 没有没有,可能是运气吧,因为我是倒数第二个进来的,你看这运气大不大。(いえいえ、運が良かっただけです、私は下から2番目の成績で入ったので、すごくラッキーですよ。)

→ 27 C06 那也需要努力,不然可能就下去了,所以,还是因为实力在那<笑>。(それでも努力が欠かせないんだよ、じゃないと落ちてしまう可能性があるし、なので、やはりちゃんと実力があるからだと思う<笑い>。)

28 C07 [点头]嗯嗯。(「頷きながら」うんうん。)

例4の会話参加者は、同じ研究科の大学院生である。C07は自分はいあまり苦労せずに大学院に合格したことを語っている。その情報を聞いたC06は25行目で「とてもすごい」「ちゃんと実力があるから」とほめている。そのほめに対してC07は「いえいえ」と不同意を示し、「運が良かっただけ」「すごくラッキー」と、合格したことを幸運のおかげにしている。続いて、C06は27行目で、「それでも努力が欠かせないんだよ、じゃないと落ちてしまう可能性があるし」「やはりちゃんと実力があるからだと思う」と、ほめを受け入れなかったC07を説得しようとし、もう一度ほめを行っている。その説得を受けて、C07は28行目で同意を示した。このように、27行目のほめが行われるきっかけは、26行目の受け手の非受容的な応答であると思われる。つまり、ほめ手は、受け手を説得するために27行目のほめを発話したと考えられる。

本研究では、相手からほめまたは肯定評価を与えられた場合や、何らかの恩恵を受けた場合において、そのお返しとして行われるほめを「お返し型」とする。

例5「お返し型」のほめ

72 C15 我感觉你们这种,读研究生的,读博士的都特别厉害。(なんかあなたのような修士課程、博士課程まで行く人は本当にすごいと思います。)

73 C13 其实也没啥,真没啥,你要是读了你就知道了<笑>。(大したもんじゃないよ、本当、あなたも行けばわかります<笑い>。)

74 C15 但在别人看来就是很厉害嘛。(でも、他の人から見ればすごいんだもの。)

→ 75 C13 嗯,对,你看你可是医生,你又是飞行员,这都是多好的职业啊。(うん、そうだね、ほら、お兄さんは医者で、あなたはパイロットで、どれも立派な仕事ですね。)

例5の70行目までに、C13とC15はお互いの職業と家族について話していた。72行目でC15は、大学院で学んでいるC13を「修士課程、博士課程まで行く人は本当にすごい」とほめている。それに対してC13は「たいしたもんじゃない」と受け入れていない。そして、C15は74行目で、C13がほめを受け入れてくれるよう「でも、他の人から見ればすごいんだもの」と説得しようとしている。今度C13は「うん、まあ」とほめを受け入れてから、「ほら、お兄さんは医者で、あなたはパイロットで、どれも立派な仕事ですね」と、C15と家族の仕事をほめ返している。このように、75行目のC13によるほめは、ほめてくれたC15への1種のお返しとして捉えられる。

これまで分析してきたパターンはいずれも、相手の発話に対する反応としてほめる場合である。それに対して、「話者導入型」のほめは、直前の相手の発話がかき付けで現れるものではなく、ほめ手が自発的にほめの対象を会話に導入してほめに結び付けることに特徴がある。

例6 「話者導入型」のほめ

42	C07	你的兴趣爱好是什么呀?。(趣味は何ですか?)
43	C06	我的兴趣爱好,(私の趣味,)
44	C07	是化妆吗?。(化粧ですか?)
45	C06	<笑>那倒不是,我的<兴趣是><【。(〈笑い〉いや違う、私の<趣味は><【。)
→ 46	C07	【<我觉得><【你化的挺好的,今天。【<私は><【メイクがとても似合っていると思います、今日の。)
47	C06	没有,我只是涂了个口红<笑>。(いやいや、リップを塗っただけです<笑い。)

例6の42行目で、C07はC06の趣味について聞いているが、C06の回答を待たずに44行目で「化粧ですか」と、化粧に関する話を導入している。それに対してC06が「いや違う」と否定し、「私の趣味は」と答えようとする時に、C07は話に割り込んで「メイクがとても似合っている」とほめている。このように、例6において、ほめの対象となるのはC06のメイクであるが、46行目のほめが行われる前に、C06は自分のメイクについて言及していない。つまり、例6におけるほめは、ほめの受け手の話に対する反応ではなく、ほめ手が自らほめの対象を会話に導入してほめに結び付いたのである。

これまでの分析から、会話におけるほめの出現には一定のパターンがあり、さらに、行われるコンテキストによって、ほめは様々な効果を果たしていることがわかった。これらのパターンの出現頻度は表1のとおりである。

表1 日中の初対面会話における各出現パターンの数

	同調型	回復型	価値見出し型	説得型	お返し型	話者導入型	合計
日本語	17(37.0%)	2(4.3%)	24(52.2%)	1(2.2%)	2(4.3%)	0(0%)	46
中国語	16(33.3%)	2(4.2%)	23(47.9%)	2(4.2%)	2(4.2%)	3(6.3%)	48

Fisherの正確確率検定を行ったところ、日本語と中国語との間で、各出現パターンの数に有意差はなかった。

日中ともに、「価値見出し型」のほめが最も多かった。日本語と中国語の初対面会話におけるほめの約半分は、相手の(自己評価が述べられておらず、または中立的に述べられている)発話から、ほめに値する部分を見出して高く評価するものであった。また、日中ともに、2番目の多かったのは「同調型」のほめであった。この2つのパターンは、日中の初対面会話におけるほめの8割以上を占めていた。また、この2パターンはほめとともに、話し手が受け手から得た(肯定的・中立的な)情報に基づいて、受け手を高く評価するものである。ここから、日中の母語話者はともに、初対面相手から得た情報を相手へのほめにつながり、良好な対人関係を構築しようとしていることが窺われた。

一方で、日本語と中国語では共通して、「回復型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」の数が少なかった。「回復型」のほめは、否定的な自己評価をしている相手の気持ちを回復するために行うものであり、その数が少なかったのは、初対面の相手に否定的な自己評価を述べるケースがもともと少ないためではないかと思われる。また、「説得型」のほめが少なかったのは、初対面の相手に対して、説得のしようがなく、または強引な説得で相手の不愉快を招くのを回避しているためと思われる。さらに、話者間の相互理解が足りない初対面会話では、ほめてくれた相手をほめ返す(「お返し型」)ことや、自発的に相手に関する事柄を会話に導入してほめる(「話者導入型」)ケースが起きにくいと思われる。

5. まとめ

本研究では、ほめの出現パターンに関して、会話におけるほめが現れるに至るまでのやりとりを質的に分析した結果、「同調型」「回復型」「価値見出し型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」という6つが観察された。

これらの出現パターンについて、日中対照の観点から分析した結果、有意差が見られなかった。日中の初対面会話における8割程度のほめは、「価値見出し型」と「同調型」であった。日中の母語話者はともに、初対面相手から得た情報を相手へのほめにつながり、良好な対人関係を構築しようとしていることがわかった。また、日中ともに、話者間の相互理解の欠如や初対面という場面の制約などの原因で、「回復型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」のほめが少なかった。

初対面会話に現れるほめの背景には、会話の場で得た情報を処理し、ほめに結び付けるプロセスがあるのに対して、友人間では、すでに有している相互理解も参照される。今後は、友人同士の会話におけるほめに関しても分析したい。

参考文献

- 伊藤由希子 (2012). 相手に伝わる「ほめ」の条件—「すごい」の受け止められ方を手がかりに— 待遇コミュニケーション研究, 9, 1-16.
- 金庚芬 (2012). 日本語と韓国語のほめに関する対照研究 ひつじ書房
- 熊取谷哲夫 (1989). 日本語における誉めの表現形式と談話構造 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究, 2, 97-108.
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版
- 王欣 (2020). 日本語と中国語の褒めの言語行動の対照研究—談話展開の観点から— 九州大学博士論文
- 山路奈保子 (2004). 日本語の談話における「ほめ」の機能 比較社会文化研究, 15, 109-118.